

# イバン族の日本軍政に対する記憶と認識

—サラワク州・シブにおける調査から—

三浦 哲也<sup>1)</sup>

## Memories and Recognitions of Japanese Military Administration: An Oral Interview Record of the Iban, Sarawak, Malaysia

Tetsuya Miura<sup>1)</sup>

### Abstract

As amicable relationships with Southeast Asian countries become more and more important to Japan, it is a very critical issue to validate the feelings of people in this area toward Japan historically. This article aims to report about some aspects of memories and recognitions of Japanese military administration during WWII in Iban society, Sarawak, East Malaysia. Japanese military administration disrupted people's livelihood, but Iban people could barely be assaulted or massacred. Therefore, Iban people do not have terrible aversion to Japanese military administration in contrast to ethnic Chinese.

**Key words:** Japanese military administration, feelings toward Japan, Iban society  
**キーワード:** 日本軍政, 対日感情, イバン族社会

### 1. はじめに

本稿では、東マレーシア・サラワク州シブに居住する先住民イバン族が、かつての太平洋戦争時の日本軍政に対していかなる記憶と認識を有しているかについて現地調査に基づいて述べるものである。まず始めに、本研究の対象地域である東マレーシア・サラワク州の歴史を簡単に説明しておきたい。

かつてこのサラワクの地はブルネイのスルタンが「領有」していた。「領有」といっても、官僚組織による明確な統治機構が存在していたわけではない。沿岸に居住するムスリムを中心とする人々が、スルタンに畏服していた、という程度のものである。そこに、白人王＝ジェームス・ブルックが現れる。19世紀半ば、この地域におけるイバン族の内乱をスルタンに代わって鎮圧したことから、英国人探検家ジェームス・ブルックがこの地域に領地の割譲を受け、ラージャ（藩王）に任じられて「サラワク王国」が建設され、「国家」めかしい体裁を取り始めたのである。

1) 育英短期大学現代コミュニケーション学科

ブルックはイギリスを後ろ盾にしてさらにブルネイのスルタンから領土を奪って王国を拡大した。国王は、2代目チャールズ・ブルック（在位1867-1917年）、3代目ヴァイナー・ブルック（在位1917-1946年）に継承された。1888年には英国の保護領となり、1941年には憲法が制定され、形式的に立憲君主制になったが、その直後に太平洋戦争がはじまった。サラワクは日本によって占領され、終戦まで軍政統治された。その間、ヴァイナー王はオーストラリアに亡命していたが、終戦後に王位を辞退したことからサラワクはイギリスの直轄植民地となった。その後、サラワクは1963年にイギリスからの独立を果たし、先に独立していたマラヤ連邦などとともにマレーシア連邦を形成し、現在に至っている。

この地の先住民にとっては、自らを近代的な「国家」として初めて統治したのは「サラワク王国」であった。それ以前は一部の沿岸居住のムスリムがブルネイのスルタンに形式的に畏服していたに過ぎないのだが、そこに白人の「国家」が覆い被さってきたのである。

サラワク王国は、原則として外国資本の直接投資を禁止して先住民の利益保護を図るなど、先住民には融和的で、過酷な植民地的搾取はあまり見られなかったといわれる。その一方で、19世紀中頃からサラワク王国は華人の移民を政策的に受入れており、結果としてサラワクの富を英国人のみならず華人にも蚕食されたのは「サラワク王国」の責である、という先住民の言い分も理解できる。そのような白人王による植民地統治の次にやってきたのが日本人による軍政統治だったのである。

## 2. 調査の目的と対象について

本調査は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「サラワク・シブにおける華僑社会の形成と変容、対日歴史記憶に関する総合的研究」（研究課題番号25370824、研究期間2013～2015年度（予定）、研究代表者；山本真（筑波大学人文社会科学研究科））の一部として行われているものである。この科研プロジェクトは、東マレーシア・サラワク州のクチンおよびシブを対象とし、日中戦争前期における抗日運動や太平洋戦争期における日本軍政の実態および現地住民の対日記憶について、文献資料と現地調査から明らかにしようとするものである。

筆者はこの科研プロジェクトに研究分担者として参加し、主にイバン族を中心とするサラワク先住民の日本軍政期に対する歴史認識や対日感情について、また同時期のサラワク先住民と華人住民との間の民族間関係についての調査を担当している。今回、2014年9月の調査においては、主にサラワク州シブ省（district）において聞き取り調査を行った。

調査地であるマレーシア・サラワク州の人口は247万人あまりであるが、その内訳は、イバン族（約71万人）を筆頭とする先住民が119万人、次いで華人が約58万人、マレー人が約57万人などとなっている（State Planning Unit, Sarawak Government 2012）。

一般にマレーシアはマレー人・華人・インド人の主要3民族を中心とする多民族国家として語られることが多いが、そのような人口構成はマレー半島部に顕著に見られるものであり、サラワク州には当てはまらない。サラワク州においては半島部マレーシアとは異なる民族間関係が展開されてきたのである。

筆者の調査の対象地域となるシブ省は、シブ市、カノウィット（Kanowit）郡、セランガウ

(Selangau) 郡からなるが、シブ省全体での人口は約30万人であり、そのうち最も人口が多いのは華人で約12万人、以下イバン族が約11万人、マレー人が約2万6千人などとなっている。しかし、シブ省の華人人口のほとんどがシブ市に集中しており、カノウィット郡、セランガウ郡では人口の8～9割をイバン族が占めている（表1）。

表1 サラワク州シブ省の民族別人口（2010年）

	マレー	イバン	ビダユ	メラナウ	その他 先住民	華人	インド人	その他	外国人	合計
Sibu 市	24,937	69,711	1,813	14,612	3,453	116,958	749	1,213	14,549	247,995
Kanowit 郡	1,147	24,036	86	259	241	2,800	46	87	252	28,954
Selangau 郡	556	19,703	97	203	271	939	24	82	944	22,819
合計	26,640	113,450	1,996	15,074	3,965	120,697	819	1,382	15,745	299,768

State Planning Unit, Sarawak Government (2012) より抜粋

イバン族は、東南アジアにおける代表的な焼畑農耕民族として知られており、その焼畑技術と村落社会組織に関しては Freeman による古典的かつ著名な社会人類学的研究がある(1955, 1970 など)。また東南アジア地域に広く分布するロングハウスという居住形態をとっている典型的な民族でもある(Waterson 1990ほか)。ロングハウスとは、この地域の先住民の住居で、一つの長大な家屋を仕切って多くの家族が居住する大規模な長屋住居である。

一方、サラワク州の華人はマレーシアの他の地域と同様、都市に多く居住しているが、他地域に比べると比較的農業に従事している者も多いとされる。これは20世紀初頭、当時福建省で宣教を展開していたメソジスト監督教会が信徒を農業移民として当地に送り込んだことに一部起因していると考えられる(山本 2010, 2014 a)。

今回、筆者が調査を行ったのは、シブ省内のカノウィット郡の行政中心地であるカノウィット市街地の周辺地域である。カノウィット市街地はマレーシア最大の河川であるラジャン川の中流域に位置する小規模な街であり、その中心部には華人の個人経営の商店が120軒ほど並んでいる。そして市街地に隣接するように、先住民やマレー人の村落が存在している。ただし、市街地周辺の農村部では、表1の人口統計に見られる特徴そのままに、イバン族が最も優勢である。

### 3. 軍政下におけるイバン族

日本軍によるサラワク占領は太平洋戦争開始直後、南方作戦の一環として実施された。南方作戦は、開戦と同時に英領マラヤ（マレー半島部）と米領フィリピンを急襲し、さらに蘭印を攻略して石油などの重要資源を確保することが目的とされた。サラワクには北部のミリ地域に油田があり、日本政府はこれに早くから注目していたようで（外務省通商局 1930）、開戦間もない1941年12月16日、陸軍の部隊によりミリを占領し、さらに同24日にはサラワク王国の首都クチンを占領した。その際、ミリでは英軍は戦闘せずに撤退、クチンでも組織的な抵抗はほとんどなかったという。

1942年4月に小規模な兵力でボルネオ守備軍が編成され、旧サラワク王国領および旧英領北ボルネオ（現在のマレーシア・サバ州）における軍政を敷き、その重要施策は、民心の掌握と治安

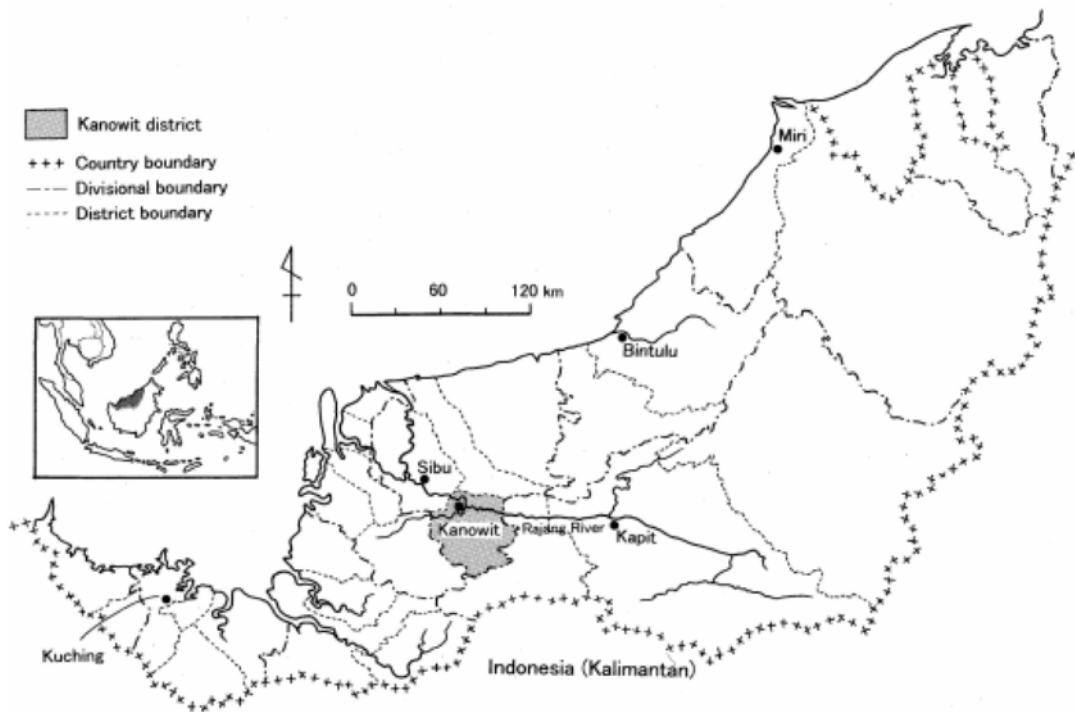


図1 サラワク州の行政区分と調査地 (Information Malaysia Year Book 1995より)

維持、国防資源の確保、産業振興および現地自活自戦の確保、の3点であった(第一復員局 1946, 山本 2014 b)。

日本軍はマレー半島部の英領マラヤおよびシンガポールにおいては、華人に対して極めて苛烈な弾圧や虐殺を行った。太平洋戦争開戦前から日本は日中戦争を戦っていたが、この日本の中国本土への侵略に対して東南アジアの華僑・華人たちは抗日救国団体を組織し、祖国への送金などの運動を展開していた。日本軍はそのような運動に参加する華人を強く弾圧し、特にシンガポール陥落後の「抗日分子」の摘発は峻烈で、直接関わりの無かった者も含め、数万人が処刑されたとも言われる(ザイナル 1983, 林 2007ほか)。

しかしながら、サラワクにおいて日本軍は現地の華人住民に対する大量虐殺は行われていない。とはいえ、抗日運動に参加する者の拘束・尋問や強制献金(国防献金)が行われるなど、日本軍は華人に対して抑圧的な政策をとった。その一方で、華人以外の現地住民に対しては融和的な方針をとった。「原住民ニ対シテハ…(中略)…其ノ地位ヲ向上セシメ優秀ナル者ハ官公吏ニ採用ス」(灘第九八〇一部隊1943)などとし、実際に下級官吏に採用されたり、軍属として雇用されたりする者も多かった。

このような対象民族によって異なる日本軍の軍政方針は、現地住民たちの中に複雑な民族間関係と感情を生み出したと考えられる。以下では、軍政を直接経験したイバン族の語り、もしくは親の世代の経験の伝承から、イバン族の立場からの日本軍政に対する記憶と認識を見てみたい。インタビュー調査はカノウィット市街地付近のKA村およびKB村において行った。これら2つ

の村は、それぞれ複数のロングハウスから成る村落で、いずれも住民は全員がイバン族である。KA村の最も古いロングハウスは1930年代から、KB村の最も古いロングハウスは1920年代から存在しているという。

#### ①BA氏 カノウィット郡KA村在住・68歳男性

日本統治時代については、父母をはじめ年寄りから聞いたことしか知らないが、当時、サラワクの先住民は日本軍を恐れなかったという。日本軍が特に恐れるようなことをしなかったからだ。

しかし、華人は日本軍を恐れた。だから、家を捨て街から逃げた。この村にも何家族かの華人が逃げ込んできたという。もちろん何の当てもなく駆け込んできたわけではなく、この村に住む知人や友人を頼って逃げてきたのである。数ヶ月以上にわたってかくまわれていたらしい。

華人の一部には勇敢に戦った者もいて、カノウィット市街地の教会の近くに華人が立てこもって抵抗した建物跡がある。今でもその時の戦闘の弾痕が生々しく残っている。

#### ②JA氏 カノウィット郡KA村在住・67歳男性

父親が日本軍属だった。聞いた話では、募集の際の約束ではライフルが与えられ、北ボルネオ（現・サバ州）へ行き、日本兵と一緒にイギリス人と戦い、しかも給料が支払われる、ということだった。父は「日本兵になれる」と思って参加したらしい。しかし、実際のところは、北ボルネオには行ったものの、ライフルは与えられず、軍服も与えられず、戦闘にも参加させられず、砲を引く馬や水牛の世話や荷物の運搬が仕事だった。途中からは軍票で受け取る給与の支払いも滞るようになり、食糧の支給も十分ではなくなったので、逃げ出して帰ってきたという。

#### ③FF氏 カノウィット郡KA村在住・74歳男性

1940年生まれなので、日本軍政の時のことは、あまり記憶に残っていない。ただ、この村にケンペイタイが来た時のことはよく覚えている。また、華人の家族がいくつか、このロングハウスに居た記憶もある。かくまわれていたのだろう。あとから知ったことだが、私の父母も山の方にある焼畑の出作り小屋に知人の華人一家をかくまっていたらしい。

日本軍はイバンに対しては何もしなかったから、イバンは日本軍を恐れなかった。強制的な物資の供出はなかったようだし、コメを日本軍に売って儲けた人の話を戦後に聞いたことがあるくらいだ。

華人の日本軍に対する抵抗については、よく知らない。カノウィット市街地のちかくで日本軍の飛行機が何者かに撃ち落とされたことがあったらしいが、華人の抵抗によるものだったのかどうか、わからない。

#### ④OK氏 カノウィット郡KB村在住・85歳男性

日本軍政時代には、12歳から15歳ぐらいだったが、日本兵と実際に直接接触したのは数えるほどだった。カノウィット市街地に出かけたときに何度か見かけたのと、村にケンペイタイが来たとき。

兄が市街地で日本兵とすれ違ったときに敬礼をしなかったのをとがめられ、日本兵に強く尻を

蹴られたことがあったらしい。それ以外にイバン族が日本兵から被害を受けたということを知らない。殺されたとか、ひどく暴行されたとか、そんなことは聞いたこともない。

ただ、日本軍政時代は、食べるものに困った。父は小さなゴム農園を持っていたが、水田を持っていなかったから、家族が食べるコメはすべてカノウィット市街地の商店で買っていた。シンガポールなどを經由してくる外国産のコメだったが、物流が滞ったせいか、まったく入荷しなくなった。さらに、日本軍は人々から銃を取り上げた。反乱を防ぐためだったのだろうが、我々は森での狩りが出来なくなり、食糧不足はさらに深刻になった。私たち家族は、空いている土地を開墾してコメやサツマイモを植え、何とかしのいでいた。開墾したわずかな水田も、時折やってくるケンペイタイが測量していき、収穫時には税として一部を差し出さなければならなかった。

カノウィット市街地のカトリック教会には白人の神父がいた。彼は、日本軍が来ると即座に捕まえられ、どこかへ連れ去られた。それを知ったイバンのクリスチャンの一部が「日本軍はクリスチャンをすべて逮捕する」と早合点して、カピットまで逃げた。

#### ⑤ SU氏 カノウィットKB村在住・82歳女性

1932年生まれで、日本軍が来たときには9歳だった。父や叔父が道路や滑走の建設のために、強制労働させられたという話を聞いたことがある。強制的な労働だったが、食事と給与はあったそうだ。給与の支払いには軍票だった。また、食糧の強制買い取りもあり、断ったり食糧を隠したりすると殴られるという噂があったので、しぶしぶ応じていた。

自分はまだ小さな女の子だったから、そのようなことはよく分からず、カノウィット市街地の日本軍の駐屯所に遊びに行き、そこで非番の日本兵がトランプ遊びをしているのを眺めているのが好きだった。言葉は分からなかったが、ある兵士に気に入られて、遊んで貰ったのを覚えている。

日本軍の駐屯所は当然男所帯だったから、洗濯などに女手が欲しかったようで、この村からも何人かの女性が募集に応じて働きに行っていた。私の知り合いの女性もその一人だったが、駐屯所の台所で、人の足のようなものが煮込まれていたのを見たと言って怖がっていた。日本兵だっていくら食糧事情が厳しくても人は食べないだろうから、たぶんサルか何かを煮ていたのだろう、と思った。

自分たちイバン族は、特に日本兵と対立することはなく、殺されたり、暴行されたりすることはなかった。しかし、駐屯所で華人の若い男性が縛られ、ひどく殴られているのを見た。なにか尋問されているようだったが、言葉が分からなかった。その若い華人男性は、さらに背中への傷に塩を擦り込まれる拷問を受けていた。

終戦直後、この村で日本の敗残兵をかくまっているという噂が立ったらしく、イギリス軍の搜索を受けた。もちろんそんな事実はなかったのだが、搜索後、村の代表者2名が手こぎの船でカピットのイギリス軍の指令所まで申し開きに行った。

上記5名の語りはそれぞれ日本軍への認識を示すものであるが、その認識のレベルは異なっている。①BA氏・②JA氏はいずれも現在60歳代であり、彼らの語りは「伝聞としての日本軍」に対する認識であるといえる。それに対して③FF氏・④OK氏・⑤SU氏は70歳代・80歳代であり、

彼らの語りは彼ら自身が幼少期に体験した直接的な「記憶としての日本軍」に対する認識である。二つの異なるレベルの認識ではあるが、いずれにおいても、「日本軍はイバン族に対しては虐殺や暴行などは行わず、全体としてさほど強権的な抑圧を加えたわけではない」と認識されている。

イバン族の集団記憶としては、「日本軍はそれほど強権的・抑圧的ではなかった」ということになるが、「伝聞」に基づく認識はステレオタイプに影響されることに留意はしておくべきだろう。

一方で、それぞれの記憶と認識の事実関係については、まず、② JA 氏の父や⑤ SU 氏の知人女性のように、日本軍に軍属として参加した者や、雇用された者もあったことが分かった。これは、サラワクの占領戦でイギリス軍との交戦もほとんど無く、連合国軍の反撃もなかったため戦場とならなかったことから、サラワクはほぼ純粋に資源の収奪地としてのみ位置づけられ、軍政の主眼が治安維持に置かれていたためだと考えられる。

日本の軍政はイバン族に対して、強制的な労働や食糧の買い上げなど、一部威圧的な政策が行われていたことも確認された。また、④ OK 氏が指摘した食糧不足に関しては、日本軍の進駐によりそれまでの流通機構が破壊され、軍政下においては船舶不足により食糧の円滑な移入が行えなかったことが原因であった（山本 2014b）。狩猟用の銃器の接収も食糧不足に拍車をかけたようである。ボルネオ守備軍の重要施策の一つが「現地自活自戦の確保」であったが、食糧自給すら成功しなかったのである。それだけではなく、日本軍政は大量の軍票を発行し、食糧の買い上げや雇用者への給与などで支払われたが、軍票は終戦後には無価値の紙くずとなった。日本の軍政統治は、当地の経済を大きく混乱させたといえる。

一方で、日本軍政は華人に対してはイバン族に比べて遥かに過酷で暴力的な抑圧を加えた。そのような暴力的に抑圧される華人に対して、イバン族は、① BA 氏や③ FF 氏が述べているように、知人や友人を日本兵の監視の緩い場所にかくまったり、あるいは山に逃がしたりしたという。

KA 村と KB 村はいずれもカノウィット市街地にほど近いので、両村のイバン族は生活必需品の売買や農林産物の売買などを通じて市街地で商店や仲買を営む華人と日常的に交流を持つ機会が多かったはずで、そのような個人的な人間関係から、困窮する華人を助けたものと考えられる。少なくともカノウィットでは、イバン族と華人の関係は日本軍政以前から良好であったことがうかがえる。

その一方で、当然のことながら、イバン族と華人との間にも軍政下の混乱の中では悲劇的な事象も数多くあったはずである。少し長いが、以下はシブ市内に在住する TO 氏の祖父についての語りである。

#### ⑥ TO 氏 シブ市在住・51歳男性

シブ市近郊の BL 村の出身である。父方の祖父は屈強なイバンの戦士で、近隣にも知られた存在だった。その祖父から、日本統治時代の話をよく聞かされた。祖父は、1908年生まれで、1990年に82歳で死去した。日本統治時代には30歳代前半だった。

BL 村はシブ市から10キロほど南西に位置し、村の人々は、塩などの生活必需品をシブ市市街で調達するため、しばしばシブ市まで買い物に出てくる必要があった。1941年、祖父母がちょうどそのような買い物に来ていたときに、日本軍のシブ市への攻撃があった。日本軍の飛行機がジャン川沿いの中国寺院に2発の爆弾を落としたため、市街は逃げ惑う人々で大混乱になった。

祖父母は、まだ幼かった私の父を連れ、大きな荷物も抱えていたが、何とか市街を脱して BL 村に戻ろうとした。しかし、そこに、その混乱に乗じて荷物を奪おうとした男があった。祖父は反射的に持っていた山鉈でその男を切りつけ、さらに父を連れ去ろうとした女（おそらく男の妻）も刺した。その男女は、顔つき、身なりから華人であることは明白だった。祖父は、その 2 人とどめを刺し、その首を村へ持ち帰った。

祖父は偉大な戦士で、それ以前にも多くの首を獲得していた。サラワク王国時代においては、イバン族同士での小規模な紛争や戦争は黙認され、むしろそれによって地域の安定を図るような部分があったらしい。だから祖父のような戦士はどの村にも存在していた。しかし、祖父がイバン以外の首を得たのは、そのときが初めてだった。

その後、シブや近郊の街は日本軍によって占拠された。街に暮らしている華人は、日本軍に抵抗しようにも、武器がなかった。だから、街から逃げるとか、供出に応じないとか、強制献金から逃れるとか、そのような消極的な抵抗しか出来なかったようだ。しかし、祖父はそのような華人の態度に対して「惰弱だ、弱腰だ、なぜ団結して戦わないのか」と思ったという。

その一方、祖父を含め、農村で暮らしているイバン族には、日本軍の影響は少なかった。たまに村にやってくるケンペイタイと呼ばれる巡察隊を応接することと、時折食糧を強制的に買い上げられるくらいだった。その強制買い上げの価格はさして悪い値段ではなかったもので、特に困ることはなかったという。だから、イギリス人が追い出されて良かったことも悪かったことも無かったが、日本軍が来ても、良くも悪くもなかった。

一方で、1945年8月、日本の敗戦が広く知られるように成った頃、祖父は、イギリス軍が戻ってきて敗残日本軍の掃討戦をやるため協力する者を集めている、という話を聞いた。祖父はこれに参加するため、サラワク北東部のブラガへ向かった。2ヶ月後、祖父は無傷で、40の首を持って帰ってきた。実際にはもっと殺したのかもしれない。ただ、その40の首は、日本兵や日本軍属のものだけでなく、華人のものも多く含まれていたという。

なぜ、どういう状況下で華人を殺したのかは聴いていない。祖父は、華人のことを憎んでいたのでは無いと思う。もちろん日本兵を憎む理由もなかったはずだ。ただ、祖父が参加していた隊の行動を邪魔する者、協力しなかった者、おとなしく降伏しなかった者を殺しただけだと思う。なにせ、かつてのイバン族は、取った首の数で男らしさを計る社会だったから。

この⑥ TO 氏の語りのみで、当時イバン族と華人の間でどれほどの対立や殺戮があったのかについて判断することは出来ない。しかし、カノウィット近郊で得られた①～⑤の語りと併せて考えると、地方の小さな市街地で個人的な人間関係で結びついていたイバン族と華人の間には相互扶助関係が成り立ち、軍政下の混乱においても連帯や助け合いが生まれたが、シブ市のような都市ではそのような対面関係が成立しにくかったことが想像できる。

また、イバン族社会においては、男性が戦争や出稼ぎなどを理由に長期的に村を離れることは、文化的背景を色濃く持つイバン族の伝統である (Kedit 1993)。そのため、⑥ TO 氏の祖父や② JA 氏の父のように、日本軍あるいはイギリス軍に一時的に身を投じた者も多かったと思われる。そのような伝統的なイバン族男性のモビリティの高さが、日本軍政時代のサラワク地域においてどのように展開され、近隣民族との関係にどのように影響したのかについては、明らかにすべき課



題である。

#### 4. 結びにかえて

今回の短期間の調査で確認されたのは、以下のような内容である。まず、日本軍政下においてイバン族は特に暴力的な支配や虐殺などを受けることはなかった。イバン族側も特に日本軍に対して強い敵意を持つようなことはなく、組織的な抵抗運動などはなく、比較的穏健な軍政統治が行われていた。しかしながら、本稿では提示しなかったがカノウィット市街地に居住していた複数の高齢の華人からの聞き取りでは、日本兵は反抗的だったり軍の要求を受入れなかったりする華人には、容赦なく殴る蹴るの暴行に加え、また、日本兵への敬礼やお辞儀を強要し、これを怠ると平手打ちされたという。威圧的・暴力的な支配と日常的な華人住民に対する迫害が行われていたこともまた事実である。

また、サラワクにおける日本軍政は、重要資源の確保と同時に産業の振興や現地での自活自戦を重要施策に掲げていながら、既存の流通網の破壊や食糧の強制買取りなどによって経済を混乱させた。当時、自給的な生業経済に依拠するところの多いイバン族は、そのような経済の混乱によって致命的な影響こそ受けなかったが、一部では食糧不足などが引き起こされた。

イバン族と華人との民族間関係については、今回の調査対象であったカノウィット郡においては、そもそも日本軍政以前から良好で、個人的な交友関係をもとに、困窮する華人をイバン族が助けるというケースが多々あったものと考えられる。しかしながら、他の地域においては、日本軍によって下級官吏に任ぜられ、治安維持の任務を与えられた先住民が、日本兵の命令の下で華人を逮捕したり虐待したりしたため、先住民と華人との関係が悪化したケースがあったとも言われる。マラヤでは、日本軍政下でマレー人が警察官として採用され、華人の抗日ゲリラを激しく弾圧したことから民族間対立が深まったが、同様のことがサラワクでも起きていた可能性は否定できない。

今後さらに調査を重ね、日本軍政に対するイバン族の認識と当時の民族間関係について分析を深めたい。

#### 〈引用文献〉

- 第一復員局 (1946) 『北「ボルネオ」軍政概要』(『北ボルネオ軍政概要』龍溪書舎, 1997復刻に所収)  
Freeman, J.D. (1955) *Iban Agriculture*, London: Her Majesty's Stationary Office  
Freeman, J.D. (1970) *Report on Iban*, London: The Anthlone Press  
外務省通商局 (1930) 『「サラワク」国事情 附「ブルネエ」国事情』  
林 博史 (2007) 『シンガポール華僑肅正：日本軍はシンガポールで何をしたのか』高文研  
Kedit, P.M. (1993) *Iban Bejalai*, Kuala Lumpur: Ampang Press  
灘第九八〇一部隊 (1943) 『北「ボルネオ」軍政要覧』(『北ボルネオ軍政概要』龍溪書舎, 1997復刻に所収)  
State Planning Unit, Sarawak Government (2012) *SARAWAK FACTS AND FIGURES 2012*,  
<http://www.spu.sarawak.gov.my/downloads/Facts&Figures/SarawakFacts&Figures2012.pdf>  
Waterson, L.B. (1990) *The Living House*, Singapore: Oxford Univ. Press  
山本 真 (2010) 「華僑とキリスト教からみる福建近代史—福建僑郷、サラワク訪問記」『中国研究月報』No.751,

pp.31-41

山本 真 (2014 a) 「20世紀前半、福建省福州、興化地区から東南アジアへの移民とその社会的背景—キリスト教徒の活動に着目して—」『21世紀東アジア社会学』第6号, pp.31-47

山本 真 (2014 b) 「東マレーシア・サラワク華人社会と日中戦争・太平洋戦争—サラワク州クチン・シブでの調査記録—」『中国研究月報』No.795, pp.38-49

ザイナル=アビディン=ビン=アブドゥル=ワヒード (1983) 『マレーシアの歴史』訳・野村 亨, 山川出版

(2015年2月4日受理)